
電車と少女と古びたベンチ

紅月 砂夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車と少女と古びたベンチ

【Zコード】

Z2510W

【作者名】

紅月 砂夜

【あらすじ】

短い電波な感じの話です。

少年が少女に駅で遭遇するだけ。

ホラー風味かもしれません。でも怖くはないような。

恋愛ものとして書いたのとあてはまるカテゴリが分からなかつたので恋愛カテゴリーになっていますが、恋愛要素はとてもなく薄いです。

僕が通学に使う駅は、田舎ではあるけれど車線は一つある。

その二つの車線に挟まれたところにホームがあるわけだけれど、そのホームには、分不相応なことにベンチが一固まりあるのだ。

片方のベンチは駅に入つてすぐのところにある真新しいもので、ほとんどの人はこちらに座る。

あまり使用者のいない駅なので、通勤ラッシュの時間帯以外は椅子が埋まってしまうということはない。

ラッシュの時間帯は皆線路のすぐ前に立つて電車が来るのを待つている。

そんなわけで、もう片方の、ホームの端にある古いベンチは使われることはほとんどなくて、目を向けられることすらあまり無いのではないか、というくらい孤独にポツツリと存在している。

僕はいつからか、その、ホームの端にある古いベンチに人が座つているのを見かけるようになつた。

高校生か、中学生くらいの女の子だ。

紺のセーラー服を着ているけれど僕では見分けがつかない。

クラスメートの青山だつたら、学校名まで特定できるんだろうけど。腰よりもまだ長い髪は真っ直ぐで真っ黒で、そのベンチに背もたれがあつたら挟まつてしまつて大変だろうなと僕に思わせた。

顔立ちも、まあ、普通に可愛い。

彼女はいつも、電車が着ても動こうとせず、黙つて見つめるだけだ。もしかしたら、僕が待つてているのと反対側を待つてているのかもしれない。

僕は朝はのぼり、夕方はぐだり、と本数が多いほうを使用していく、たいてい僕が使うほうの電車が先に来てしまうので確かめることは

できていなが。

ある朝、僕はどうしても彼女が期になつて、つい、声をかけてしまつた。

「ねえ、君、なにしてるの？」

声をかけてから、これじゃあただのナンパじゃないかと氣付いた。おとなしそうな女の子だ。

怯えさせてしまうか、痴漢扱いされるだろうか。

けれども彼女はそのどちらもせず、一度だけ僕の方を見て、そしてまた正面に視線を戻した。

彼女の視線の先には、電車。

僕が待っていた電車だ。

声をかけるタイミングを完全に間違えたな、と思いながらも、自分から声をかけた女の子を放つて電車にのることはできなかつた。いや、女の子が何も答えないままだつたならば、無視されたとしてそのまま話は終わり来ますから率先して電車に乗つていただろう。けれど女の子は口を開いた。

「電車が人を食べるのを見ているの」

それは、目の前の光景を行つているのだろうか。

人々が電車の開いたドアから次々に中へ乗り込んでいく。

なるほど、そう見えなくもない。

「でも、人間はよっぽど不味いのでしょうか。ほとんどはまた吐き出してしまうわ」

変わつた表現をする子だな、と思つた。

隣に座つて彼女の言葉を噛み碎いて、ひつかかつた部分を口にする。

「ほとんど？ 吐き出されない人もいるの？」

「いるわ。外からは忘れられるから誰も気付かないけれど。でないと電車はどうやって動いているというの？ 少しは食べているのよ」よくわからなかつた。

電車は電気で動いているのだし、人を食べたりしない。

そっか、とだけ僕は言って、ベンチから立ち上がった。

ホームの中央の、新しいベンチで次の電車を待つつもりだ。

女の子は何も言わず僕を見送つて - - といつてもその視線は相変わらず前を見ていたのだろうが - - 僕も何も言わず立ち去つた。

しばらくして来たいつもどおりの電車に乗り込んでから、ようやく

僕は、少し怖いなと思ったのだった。

(後書き)

読んでくださいましてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2510w/>

電車と少女と古びたベンチ

2011年10月9日14時55分発行